

一九八九年一二月、ペレストロイカの波は草原の国モンゴルにも到来し、人びとは移動の自由を手に入れた。このとき以来、異邦人である私たちもまた、モンゴルを歩き回り、その自然を愛する機会を手に入れたのだった。

五月、ゴールデンウイークを利用してモンゴルに向くと、すでにアネハヅルたちはヒマラヤを越えてインドやパキスタンあたりの越冬地から到来している。その飛行距離はおよそ五千キロメートル。飛行高度は八千メートル。ツルとしては最も小さいという身軽さも、この「移動民」には生来、適応しているようと思われる。

この時期、あちらこちらで見かけるツルたちはいずれも二羽で餌をついばんでいる。群れてやつて来たはずなのに、わずかなあいだにパートナーを見つけ、つがいとなつて分かれ散つて暮らしている。長旅を、まちがで共にしたものたち同士なのだろうか。それとも、途上で親を失くしたものたち同士なのだろうか。彼らの恋のきつかけを私は知らない。が、恋のゆくえはおおよそ見当がつく。鳴きながら、おどる。スリムな頭部を上下させる。

## 見つめない愛

小長谷 有紀

こながや ゆき／国立民族学博物館研究戦略センター・教授

「久しぶりにモンゴルの鳥たちのことを思い出しました。鳥ばかりではなく、モンゴルでは、月や星や雲でさえ、どこよりも美しいのではないかと思われます。世界中に1つしかないはずの月がそんなふうに見えるのはもちろん、自然だけが豊かだからではなくて、人の暮らし方も豊かであるからです」

国立民族学博物館・研究戦略センター・教授。「モンゴル草原の生活世界」「モンゴル風物誌」「モンゴル万華鏡」「モンゴルの春」「モンゴルの二十世紀」「生態移民」など著書多数。モンゴルと日本の総合的なパートナーシップの確立をめざして、NPO法人モンゴルパートナーシップ研究所を設立し、NGO活動にもたずさわっている。



そしてメスは卵を産み、オスと交代

で卵を温める。た  
くさんのツルを見  
かけるにもかかわ  
らず、その卵を見  
つけることは難し  
い。恋のあかしは  
隠されているので  
ある。たとえば、  
少し小高いところ  
に、あるいは少し  
くぼんだところに。  
約一ヶ月後に生  
まれたヒナたちは



早々に飛行訓練を  
始めなければなら  
ない。八月には雪  
さえ降り始めるモ  
ンゴルを九月まで  
には去らなければ  
ならないからだ。  
彼ら同様に草原に  
分散して暮らす遊  
牧民たちは、その  
練習風景を目撃し、その練習方法を熟知して  
いる。

まず、両親が子のをはさんで飛ぶ、といふ。  
やがて、数家族が合同演習を開始する。親た  
ちが子をはさみ、Vの字を描いて飛ぶ、と  
いう。さらに、合同演習は徐々にその規模を  
拡大し、まさしくVの字型を編成して飛ぶよ  
うになる。いよいよ最終段階。集結地点は東  
西におよそ二ヶ所あつて、そこから一斉に南  
に向けて飛び立つていく。

ある夏の終わり、数千羽のアネハヅルのそ  
ばで野営したとき、彼らの声がうるさくてと  
ても眠れなかった。翌日、彼らは巨大なVの  
字を作つて飛んでくる。ああ、行つてしまふ  
んだ、あの声はさよならの挨拶だったんだ…。  
誰しもがカメラを構え、シャッターを切り  
たくなる、その瞬間、モンゴル人ドライバー  
が言つた。「見ちゃいけない。去つてゆく彼  
らを見つめはいけないよ」

春になれば、彼らはまたやって来る。その  
ときには、手を振り回して大いに手招きする  
ことになっている。だからその逆のシーンは  
見つめずにおこう、福が去つてしまつから。  
こんなふうに、幸せは去来する鳥たちのもと  
にある、と本当に感じられてきたのだった。